

[制作記録]

乾漆技法による人間表現の探究

－活動報告（2021-2023）－

Study on Human Expression in Using by Dry Lacquer Technique :
Activity Report (2021-2023)

青木 千絵
AOKI Chie



図 1 : 《BODY 21-6－空虚の影－》(2021年)

1. はじめに

本研究では、乾漆技法が持つ造形性と柔らかな特徴を生かした造形表現として、現代を生きる人間像をテーマに新たな表現手段の探究を続けている。本稿では、2021年から制作に取り組んだ各作品《BODY 21-6 - 空虚の影 -》《BODY 22-1 - 懼おそれ -》《BODY 22-2 - 生命の記憶 -》《BODY 22-3 - 宙を懐く -》の制作記録とその後の活動成果について報告する。

2. 《BODY 21-6 - 空虚の影 -》制作

《BODY 21-6 - 空虚の影 -》(図1)は、壁に頭を預けやや前屈みに立っている人の姿を描いた1枚のラフスケッチ(図2)をきっかけに、自分自身を見失いそうになり気力を失いかけている人間をイメージして制作した。本作における新たな取り組みとして、足首より下の表現をこれまでよりも具象的な造形で仕上げた点が挙げられる。これまで爪の部分は、布や下地、塗りを重ねることによって凹凸の形は緩くなり、抽象形態と緩やかにつながる表現にしていた。しかし、《BODY 21-6 - 空虚の影 -》では、下地である錆漆¹や刻苧漆²を使い爪や指の形を盛り上げたり、彫刻刀で爪の形を彫り出したりしながらリアルな足先を目指した(図3)。さらに黒呂色は塗らずに、マコモ粉³を足に蒔き付けることで、



図2：ラフスケッチ



図3：爪を作る

全体が古色がかって落ち着いた色調になる。そうすることで、はっきりと足の形が見えるようになり、上半身の非現実的な抽象形態部分とは真逆のより現実的に地面に足を踏みしめている様子が表現できた(図4)。また、偶然にも作品撮影の際、作品と壁の間に落ちた影が、どこか自己の中にある本当の自分と直に対峙する姿に思えたことから、作品タイトルに“影”を入れることにした。

3. 《BODY 22-1 - 懼おそれ -》制作

《BODY 22-1 - 懼おそれ -》(図5)は、マケットから形を起こした作品である。本作品では、何かに怯えているのか、懼れているのか、自分の身を守るように頭を埋め内側に閉じこもる態勢をイメージしており、背中を使ってこの人物の感情表現を試みた。結果的に、これまでの作品にはなかった“肩”と“上腕”を露わにし、自分の体を抱え込むような姿を表現できた。



図4：地面を踏みしめる足
撮影：今村裕司 画像提供：現代美術艸居



図5：《BODY 22-1－懼おそれ－》



図6：《BODY 21-2》

撮影：木奥恵三 画像提供：金沢21世紀美術館

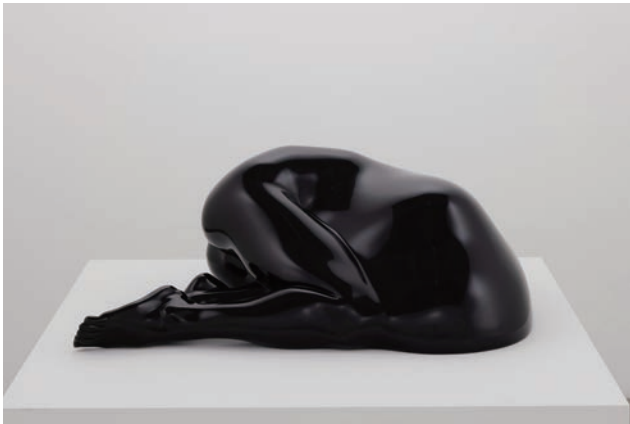


図7：《BODY 22-2－生命の記憶－》



4. 《BODY 22-2－生命の記憶－》制作

以前制作した《BODY 21-2》(図6)において、立体の一部を平らにせざるを得ない点が、立体表現として課題となっていた。これを受け、同じ作品イメージを保ちながら、どのように床に設置するのが良いか検討したのが《BODY 22-2－生命の記憶－》である(図7)。本作品では、脚を胸に引き寄せ、丸まった背中を床面にすることで、設置面を無くし、点で支える設置とした。また新たなイメージとして、まるで母親の胎内で安心している胎児の姿や、作品全体が卵形のゆりかごのような揺れる印象も付与された。その印象が“生命の記憶”というタイトルにも繋がった。さらに、足先の表現においても、足と足の重なり方や、指先、爪の角度といった細部

まで緊張感を持った美しい形にすることができた(図8)。

5. 《BODY 22-3－宙を懐く－》制作

《BODY 22-3－宙を懐く－》(図9)は、高さ147cm、幅92cm、85cmの大型作品である。この作品では、新たな塗り技法に挑戦した。それは身体部分に白漆を塗り、抽象形態の塊に向かって黒くグラデーションをかけるぼかし塗り技法である。また、さらにその上から身体部分には朱合漆から黒漆へとぼかし塗りを重ねた。このようなぼかし塗り技法という徐々に色が変化していく特性を活かすことで、鉛色の身体が漆黒の塊に強い引力で吸い込まれていく様を表現することができた。また、本作品は巨大な漆黒の



図8：足の重なりや指先、爪の表現

塊がまるであらゆる存在物を内包する宇宙のように感じられたことから、“宙を懐く”と題した。

6. 制作を終えて

上記4点の作品制作を振り返ると、過去作品に比べ肩や腕といった上半身の姿が現れ出している。これは、これまでのような身体と抽象形態の塊がただ融合するのではなく、人間の身体が抽象形態と融体化し溶け合った表現へと変化してきているようにも感じる。また、それは麻布を幾重にも貼り重ね、下地を重ねて形作る“乾漆”だからこそできる特有の穏やかな丸みを活かした唯一無二の表現ともいえる。

さらに、足の表現に関しては、よりリアルな具象表現にしたことで、抽象形態部分に負けない印象を強く与えることができた。そして、作品に日本語のタイトルを付けることを試み、制作途中や制作を終えた後に作品と対峙し相応しいタイトルを捻り出すことで、“生命”や“宙”といった自分自身の中にある新たな表現欲求の根源を捉えることができた。

7. おわりに

本稿では2021年から2023年の間における4作品の制作における乾漆による造形表現探究の結果を報告した。これら作品制作では、これまで以上に具象的表現を取り入れたことや、作品の新たな設置方法を試みたこと、さらには、ぼかし塗り技法の特性を活



図9：《BODY 22-3-宙を懐く-》

かした表現など、さまざまな挑戦があった。結果として、これまで表現できなかった新たな人間像を生み出し、具現化できたと考える。最後に、最新の展覧会活動状況を記載する。

附記

本論文は令和3年度から令和5年度の基盤研究の成果である。

註

- 1 水で練った砥之粉に生漆をまぜたもの。
- 2 麦漆に木の粉や繊維くずなどを練り合わせたもの。
- 3 マコモの実の中にある黒くて微細な種子。

○「ジャンルレス工芸展」

国立工芸館 展示室 / 2022年9月16日(金)～12月4日(日)

出展作品：《BODY 19-1》(計1点)

撮影：野村知也 画像提供：国立工芸館

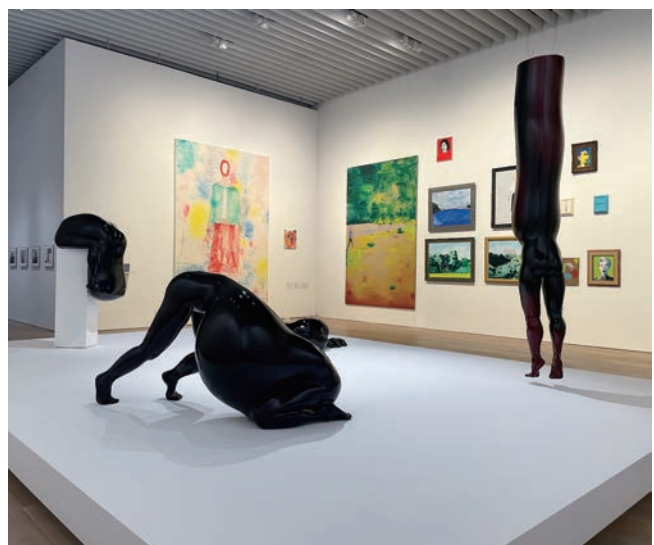


○「六本木クロッシング2022展：往来オーライ！」

森美術館（東京）／2022年12月1日（木）～2023年3月26日（日）

出展作品：《BODY 16-1》, 《BODY 17-1》, 《BODY 21-1》, 《BODY 21-3》（計4点）

撮影：木奥恵三 画像提供：森美術館



○ 青木千絵個展「沈静なる身体」

SOKYO ATUSMI (TERADA ART COMPLEX II) / 2023年1月28日(土)～2023年4月28日(金)

出展作品：《BODY21-6》, 《BODY22-1-懼おそれ-》, 《BODY22-2-生命の記憶-》 他(計16点)

撮影：今村裕司 画像提供：現代美術 艸居



○ 「幻視の小宇宙～現代漆藝4人の燐光～」

セイコーハウス銀座ホール

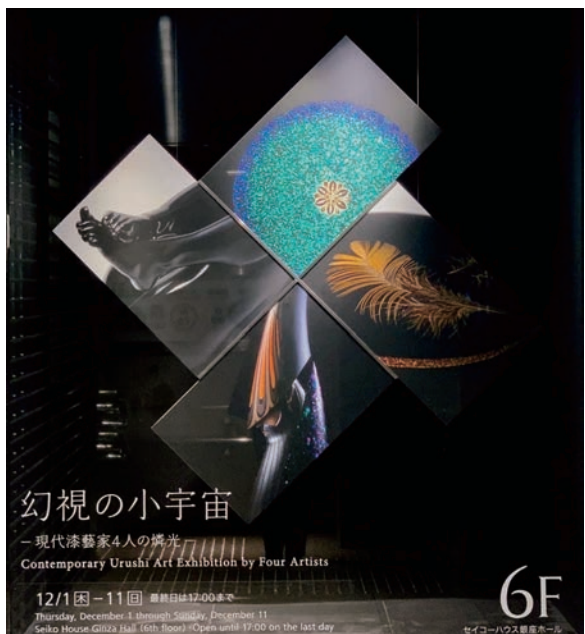
2022年12月1日(木)～12月11日(日)

出展作品：

《BODY 21-6》, 《BODY 22-1-懼おそれ-》,

《BODY 22-2-生命の記憶-》,

《BODY 22-3-宙を懐く-》(計4点)



(あおき・ちえ 工芸科/漆・木工)

(2023年11月8日 受理)